

ツツバ語の移動動詞と空間分割

内藤 真帆

日本学術振興会特別研究員／京都大学

【要旨】 本論文の目的は、ヴァヌアツ共和国のツツバ語で、移動の経路を表す三つの動詞 *sae* 「のぼる」、*sivo* 「くだる」、*vano* 「行く、横切る」が何に依拠して使い分けられているのかを明らかにすることである。はじめにこの三つの動詞についての説明を行い、続いてツツバ語話者がツツバ島内を移動する際の移動表現、副都心の置かれるサント島内を移動する際の移動表現、ツツバ島から他島へ移動する際の移動表現について考察する。そしてツツバ語において、移動の経路を表す三つの動詞 *sae* 「のぼる」、*sivo* 「くだる」、*vano* 「行く、横切る」が、①物理的な上下による対立、②心理的な上下による対立、③歴史的理由により生じた対立、という三つのカテゴリーにおいて使い分けられていることを示す。さらに、これらのカテゴリーにおける三つの動詞の関係について明らかにする*。

キーワード： ヴァヌアツ、ツツバ語、オセアニア祖語、移動動詞、空間分割

1. はじめに¹

ヴァヌアツ共和国のツツバ語では、移動の経路を表す三つの動詞 *sae* 「のぼる」、*sivo* 「くだる」、*vano* 「行く、横切る」が、ツツバ島内の移動や副都心の置かれるサント島内の移動、他島への移動といったさまざまな状況において使い分けられている。この使い分けには土地の傾斜といった物理的上下だけが関係しているのではなく、社会的、政治的、文化的、そして経済的中心への移動とそこから遠ざかる移動といった心理的上下や、宣教師到来という歴史的理由による語の対立が関与していると考えられる。そこで本論文はこの経路を表す三つの動詞 *sae* 「のぼる」、*sivo* 「くだる」、*vano* 「行く、横切る」が使用される場に焦点を当て、ツツバ語でこの三つ

* 本論文の執筆に際し、三谷恵子教授と梶茂樹教授より熱心なご指導と多数の貴重なご助言をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。また詳細かつ重要なご指摘をくださった2名の査読者の方にもお礼申し上げます。本論文における不備はすべて筆者に帰するものである。

¹ 本論文のデータは、2001年から2008年までの間に、ツツバ (Tutuba) 島やサント島 (Santo) で合計約2年の参与観察と聞き取り調査を行い得られたものの一部である。毎日の調査に積極的に協力してくださった70代のSara氏とTurabue氏(ともに未就学、ツツバ島在住のツツバ語話者)には、たくさんの方の貴重な情報を提供していただいた。ここに記して感謝の意を示したい。ツツバ語は、オーストロネシア祖語から派生したオセアニア祖語 (Proto Oceanic) に由来する言語である。Lynch (1998: 46) の分類によると、ヴァヌアツ (バヌアツとも呼ばれる) の100あまりの現地語は南オセアニアグループと中央太平洋グループに二分でき、前者はさらに北・中央ヴァヌアツグループと南メラネシアグループに下位分類できる。ツツバ語はこのうち北・中央グループに属すると考えられている。

の動詞が何に依拠して使い分けられているのかを明らかにする。またツツバ語話者が彼らを取り巻く環境や社会をどのように捉えているのか、彼らの世界観に迫ることも本論文の目指すもうひとつのところである。

以下、2章でツツバ島とツツバ語について概説し、3章でツツバ語とオセアニア祖語の移動動詞について説明する。続く4章でツツバ島内の移動表現について考察し、5章でツツバ語話者がサント島内を移動する際の表現について論じる。6章ではツツバ島から他島へ移動する際の表現について分析し、最後に7章で結論を述べる。

2. ツツバ島とツツバ語

はじめにヴァヌアツ共和国、特に本論文で扱うツツバ島の位置とツツバ語について概説する。

ヴァヌアツ共和国は、オーストラリアから東に3～4時間ほど飛行機で移動したところに位置する島嶼国である。

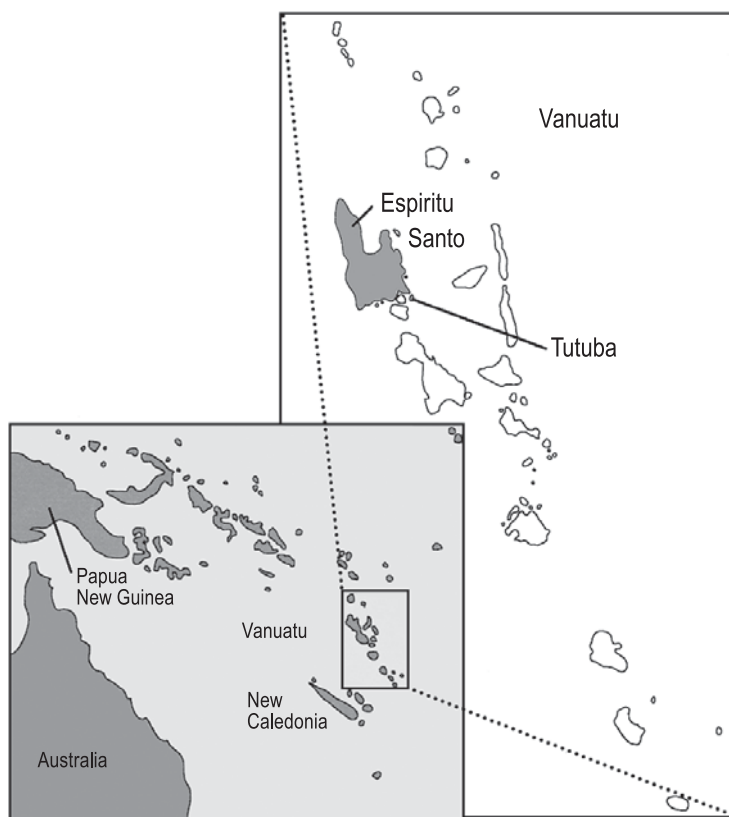


図1. ヴァヌアツ共和国とツツバ島

この国はアルファベットのY字を形成するように並ぶ83の島々から構成されており、Crowley(1995)によると、そこでは113とも数えられる現地語が話されている。このうち最南端から数えて3つの島で話される現地語はポリネシア系の言語であり、それ以外の島々で話されている現地語はメラネシア系の言語である(Crowley 1995)。本論文で扱うツツバ語は、副都心の置かれるサント島から船外機つきのボートで約40分の距離に位置するツツバ島で話されている。この言語はメラネシア系の言語であり、ツツバ島の住人、500人(1999年統計)の大多数に日常的に用いられている²。

ヴァヌアツの憲法では、クレオール言語であるビスラマ語が国語として制定され、ビスラマ語、英語、フランス語の三言語が公用語として制定されている。これはこの国が1970年に独立するまでの間、イギリスとフランスの共同統治領であったことに由来する。また学校教育では、英語またはフランス語のどちらかの使用が義務付けられている。ツツバ島には小学校が一校のみ存在し、ここでは授業が英語で行われている。

3. ツツバ語とオセアニア祖語の移動動詞

本論文ではツツバ語の移動動詞の中でも、次に示す経路の動詞に焦点をあてて論じる。

sae/sa 「のぼる」
sivo/si 「くだる」
vano/va 「行く、横切る」

経路の動詞 sae, sivo, vano にはいずれも語頭の一音節からなる異形態 sa, si, va がある。以下の例(1)に示すように sae, sivo, vano は補語を必要としない。一方、異形態 sa, si, va は方向を表す指示代名詞や, alao「海岸に」などの場所を表す副詞, Olotu「サント島」などの固有名詞や普通名詞を必要とする。ただし意味的に矛盾する名詞や副詞を補語にとることはできない。例えば, sae「のぼる」の異形態 sa は、似た意味の指示代名詞 tisan/tisanatu「のぼり側」や副詞 auta「丘に」とは共起できるが(2)、指示代名詞 tisin/tisanatu「くだり側」や水平方向を表す tivan/tivanatu/tivaba「横」、低地を意味する副詞 alao「海岸に」とは共起することができない(3および4)。

なおこの言語では動詞の前に主語の人称・数・法がひとつの形態素に融合した接語(以下の例文では ka=)が義務的に置かれる。本論文で用いる略号は次のとおりである。sg=singular, pl=plural, inc=inclusive, r=realis, ir=irrealis, ref=referential form, pp=preposition。sg と pl の前の数は人称を表す。

² ヴァヌアツでは、10年毎に国勢調査の結果が発行される。最新版は2009年に発行される予定であるが、現時点ではまだ発行されていないため、本論文は1999年の国勢調査報告書(The Republic of Vanuatu 1999)のデータを用いている。

- (1) ka=sae
1sg.ir=のぼる
「私のはのぼる」
- (2) ka=sa tisan
1sg.ir=のぼる のぼり側
「私のはのぼり側に行きます」
- (3) *ka=sa tisin
1sg.ir=のぼる くだり側
- (4) *ka=sa tivan
1sg.ir=のぼる 横

これらの動詞 sae/sa 「のぼる」、sivo/si 「くだる」、vano/va 「行く、横切る」は、それぞれ以下のオセアニア祖語に由来すると考えられる。ここに示したオセアニア祖語は、Ross (2004) が再建したものである (François 2004)。

オセアニア祖語の移動動詞

- *sake 「上方向に、丘の上の方へ、島の(真ん中に)向かって行く」> sae/sa
*sipo 「下方向に、海のほうに向かって丘をくだる」> sivo/si
*pano 「話し手から離れていく、横切る、
(「のぼる」「くだる」のどちらでもない)> vano/va

4. ツツバ島内の移動表現

ツツバ島には、島の南西と北東を結ぶ一本の平坦な道が海岸線沿いに走っている。そして道を隔てて海岸と逆方向には、道と平行に丘が広がっている。ツツバ語では、ツツバ島の北西側の一地点 (A) が移動の起点であるとき、この起点から小高い丘の方向への移動は① sae 「のぼる」と表され、海の方と、道の一方向への移動は② sivo 「くだる」と表される。そして道のもう一方への移動は③ vano 「行く、横切る」と表される。次の図2はそれぞれの方向への移動を矢印で表したものである。なお海への移動と道の一方向への移動は同じ語で表されるが、下の図では便宜上、海への移動を②、道の方向への移動を②'としている。

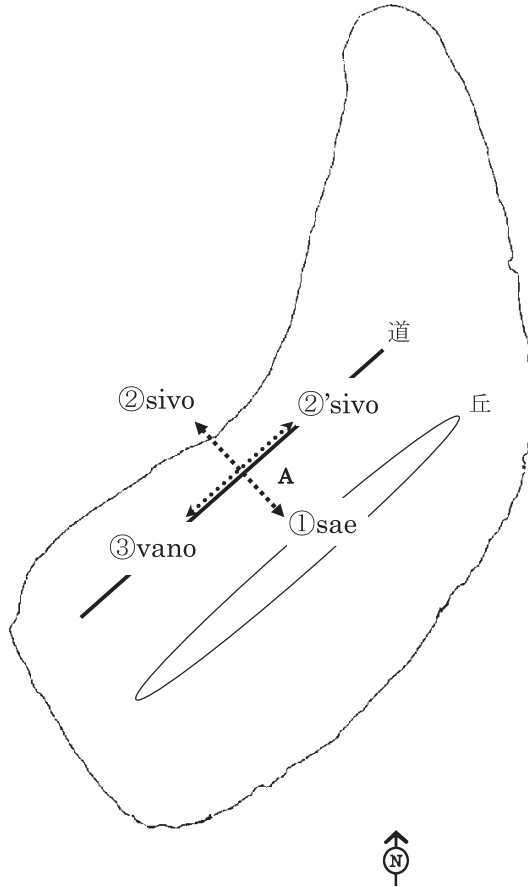


図2. ツツバ島内の移動表現 (A)

次に丘を隔てた内海側に移動の起点 (B) があると仮定する。内海側の地点 B から小高い丘への移動は、やはり sae 「のぼる」であり、丘から内海への移動は sivo 「くだる」である。そして浜辺の一方 (北東の方向) への移動も先の A 地点からの移動と同様、sivo 「くだる」と表される。この浜辺を逆方向 (南西の方向) へ移動するときには vano 「行く、横切る」が用いられる。

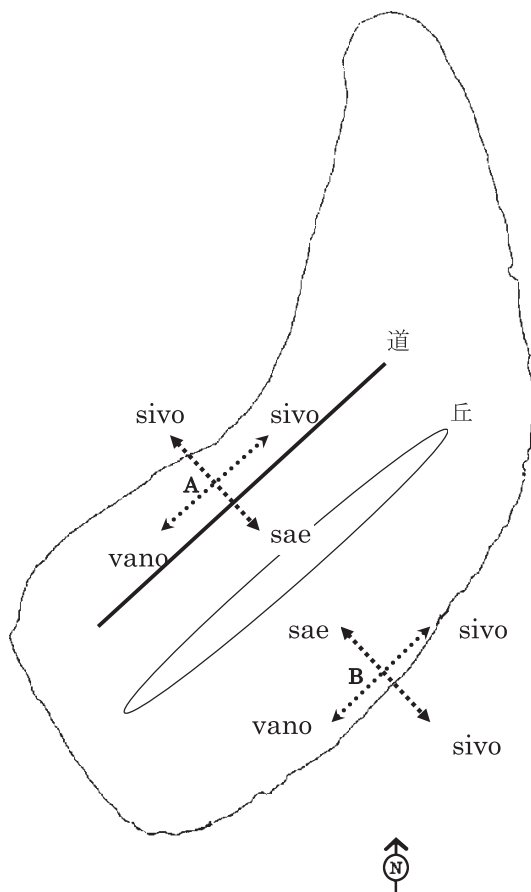


図3. ツツバ島内の移動表現 (B)

さらにツツバ島において起点を変えて移動表現を調べたところ、どの方向であろうと海への移動には sivo 「くだる」が用いられ、丘への移動には sae 「のぼる」が用いられることが判明した。例えばツツバ島の中腹には丘が広がり、四方は海に囲まれているため、丘から「くだる」と言うときは、起点から360度、すべての海岸方向が示唆される。逆に海側から「のぼる」と言った場合、移動の起点により示唆される丘の方角は東西南北、いずれにもなりうる。起点と着点の間に認識できるほどの傾斜がない場合は、起点にかかわらず、常にツツバ島の南西方向への移動に vano 「行く、横切る」が用いられ、その逆である北東方向への移動に sivo 「くだる」が用いられる。

ツツバ島内において、移動の起点にかかわらず丘方向への移動に sae 「のぼる」

が用いられ、海方向への移動に *sivo* 「くだる」が用いられるのは土地の傾斜を考えると自然であり、この移動表現には物理的上下における対立が関係していると解釈できる。しかし *sivo* 「くだる」が、海方向だけでなく平坦な道の北東方向にも用いられ、*vano* 「行く、横切る」と対立するのはなぜか。

4.1. 横方向への移動

物理的上下に依拠していない *vano* 「行く、横切る」と *sivo* 「くだる」の対立は、南西と北東という方角に依拠しているものであるかのように思われる。しかしながらツツバ語には方角に関する表現が存在しておらず、例えばそれぞれの方角から吹く風は、東風や西風ではなく *marahae* 「丘のほうから吹く風」、*adua tavanav* 「マレクラ島（マラクラ島とも呼ばれる）のほうから吹く風」のように、丘や島といった、具体的で身近な指標を用いて表される。

では南西方向と北東方向への移動表現の違いは、ツツバ語話者にとって何に依拠したものであるのか。François (2004) は、オセアニアのいくつかの言語において、移動の動詞が使い分けられる上での基準となっているのは太陽の動きであることを指摘している。この先行研究を踏まえ、ツツバ語と太陽の動きについて考えてみる。

ツツバ島には電気、水道、ガスといったインフラや時計がなく、話者は太陽の動きを軸に一日を過ごす。ツツバ語話者の生活と太陽は非常に密接な関係にあり、この言語では太陽の動きを表す語彙や表現が豊富である。この言語では太陽の昇りを表す動詞として *sae* 「のぼる」が (5)、降りを表す動詞として *sivo* 「くだる」が用いられる (6)。これは先に3章で示したように、人々が傾斜地を移動するときに用いる語と同じである。

(5) *alo-i* *ma=sae*
 太陽-ref 3sg.r=のぼる
 「太陽がのぼる」

(6) *alo-i* *me=sivo*
 太陽-ref 3sg.r=くだる
 「太陽が沈む」

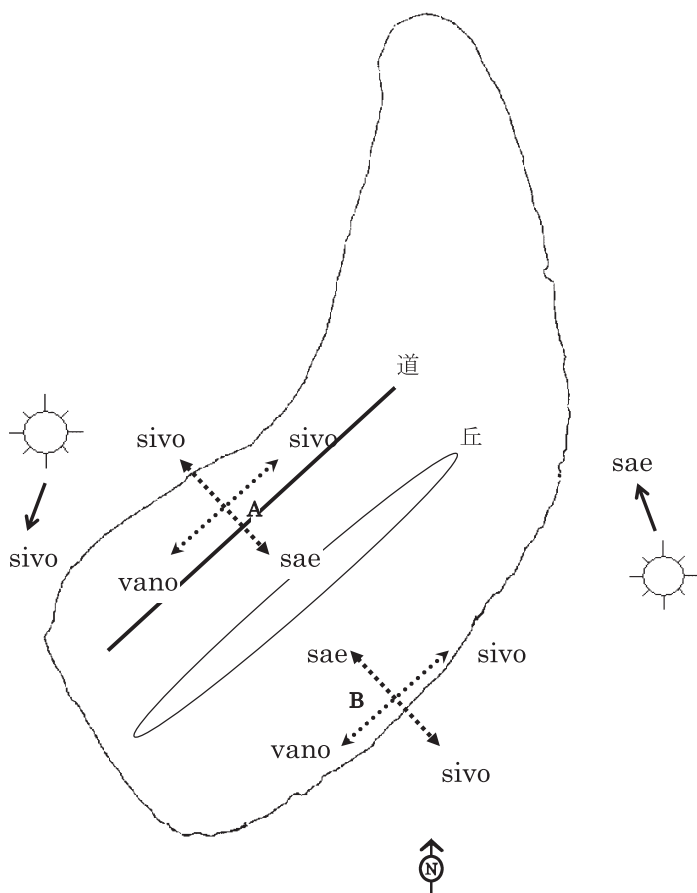


図4. 太陽の動きとツツバ語の動詞

太陽が東から昇り西に沈むことを考えると、島の南西部と北東部を結ぶツツバ島の一本道のうち、北東側への移動、すなわち日昇側に *sivo* 「くだる」が用いられるのは不自然である。太陽の動きと移動の動詞が関連しているならば、むしろ日没すなわち西または南西の方角への移動に、*sivo* 「くだる」が用いられるのがより自然と言える。

このように考えると、ツツバ語では太陽の動きと移動の動詞とは関連性が薄い、ということが分かる。つまりオセアニアの言語の中には移動動詞が太陽の動きと関連しているものもあるが、ツツバ語では関連していないと結論付けることができる。

4.2. オセアニア祖語とツツバ語の比較

平坦な一本道を南西方向に移動するとき vano 「行く、横切る」が用いられ、北東方向に移動するとき sivo 「くだる」が用いられるのはなぜか、その理由を今度はオセアニア祖語とツツバ語の移動動詞の違いに着目し、ツツバ島の歴史とツツバ語の意味拡張という観点から考える。

図5は、オセアニア祖語とツツバ語の移動動詞が示唆する方向を矢印で表したものである。図では海と丘の方向を実線、道を破線で表し、二つの線が交わる位置に移動の起点 (A) があると仮定して、そこからの移動がどの動詞で表されるかを示している。なお次の図5のうち、オセアニア祖語の方は François (2004: 17) の Figure 7 を上下反転させたものを引用している。

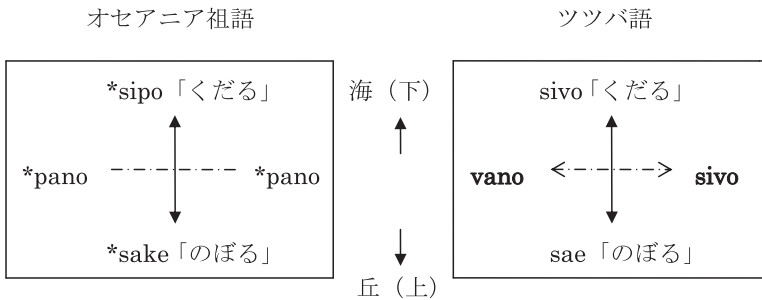


図5. 祖語とツツバ語の移動動詞

祖語では上への移動を表す *sake 「のぼる」に下への移動を表す *sipo 「くだる」が対立し、横の移動は *pano 「行く、横切る」の一語で表される。一方、ツツバ語では下の移動だけでなく横の移動を表す語にも、*sipo 「くだる」に由来する sivo 「くだる」が用いられる。つまりツツバ語の sivo で表現される移動の範囲は、祖語の *sipo に比べて広く、そのために横の移動を表す vano (<*pano) 「行く、横切る」の示唆する範囲が祖語よりも狭いということになる。

このようにオセアニア祖語と比較すると、ツツバ語の動詞 sivo 「くだる」の用いられる範囲が拡張されたであろうことは明らかである。

4.3. ツツバ島の歴史と sivo 「くだる」の意味拡張

ツツバ島では宣教師が20世紀の半ばに島にやって来るまで、人々は丘の上に住居を構えていた³。宣教師は島の北東に位置する海岸沿いの低地ヴェオア (Veoa) 地

³ 資料が残されていないため、宣教師到来の年など詳しいことは判然としない。宣教師の到来した年代、場所、人々の移動にかんする本論文中の記述は数名の高齢者 (70代後半) の話に基づいている。なお彼らの多くは敬虔なキリスト教信者である。

域に滞在して布教活動を行い、島の人々は彼らの到来により丘を降りてきた。そして次第に海岸沿いに居住するようになった。丘からヴェオア村（図6のv地域）へは下り方向であったため、人々はヴェオア村への移動を表す語として sivo 「くだる」を用いていたと推測される。

宣教師の到来する前、ツツバ島でも海側、丘側といった土地の傾斜が関係しない移動、つまり図5の点線で示した水平な横の移動には、再建されたオセアニア祖語や近隣の言語と同様、方向にかかわらず vano 「行く、横切る」の一語が用いられていたと考えられる。しかし海岸沿いに移住した人々にヴェオア村の方向を表す語として sivo 「くだる」が引き続き用いられた結果、sivo 「くだる」が拡張されて、sivo 「くだる」はヴェオア村側の横の移動を表す語としても定着した。そしてヴェオア村とは逆の方向への移動には依然 vano 「行く、横切る」が用いられたことから、結果として vano 「行く、横切る」と sivo 「くだる」が、横の移動において対をなすようになった（図6）。

以上の理由により、ツツバ語では sivo 「くだる」が二方向への移動を表し、本来オセアニア祖語の *pano のように vano 「行く、横切る」がカバーすべき領域においても、sivo 「くだる」が用いられるようになったと考えられる。

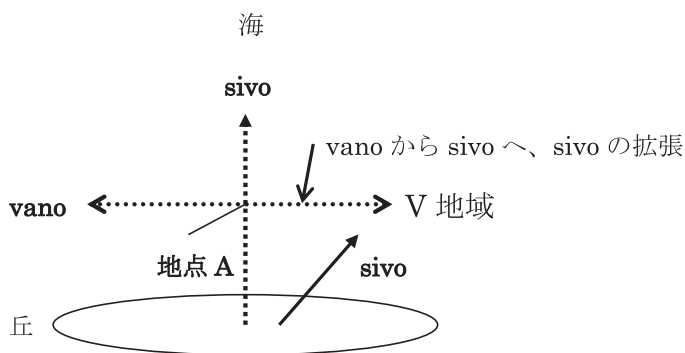


図6. sivo 「くだる」の拡張

つまり sivo 「くだる」は本来、傾斜がある移動において sae 「のぼる」と対をなす相対的な移動の動詞であったが、その使用が絶対方向化され、そしてさらに平坦移動において vano 「行く、横切る」と対になって用いられるようになったといえる。

以上のことから、ツツバ島内の移動における丘方向への移動 sae 「のぼる」と海方向への移動 sivo 「くだる」が物理的な上下に依拠した対立であるのに対し、南西方向への移動 vano 「行く、横切る」と北東方向への移動 sivo 「くだる」は、歴史的な理由から生じた対立であると結論付けることができる。

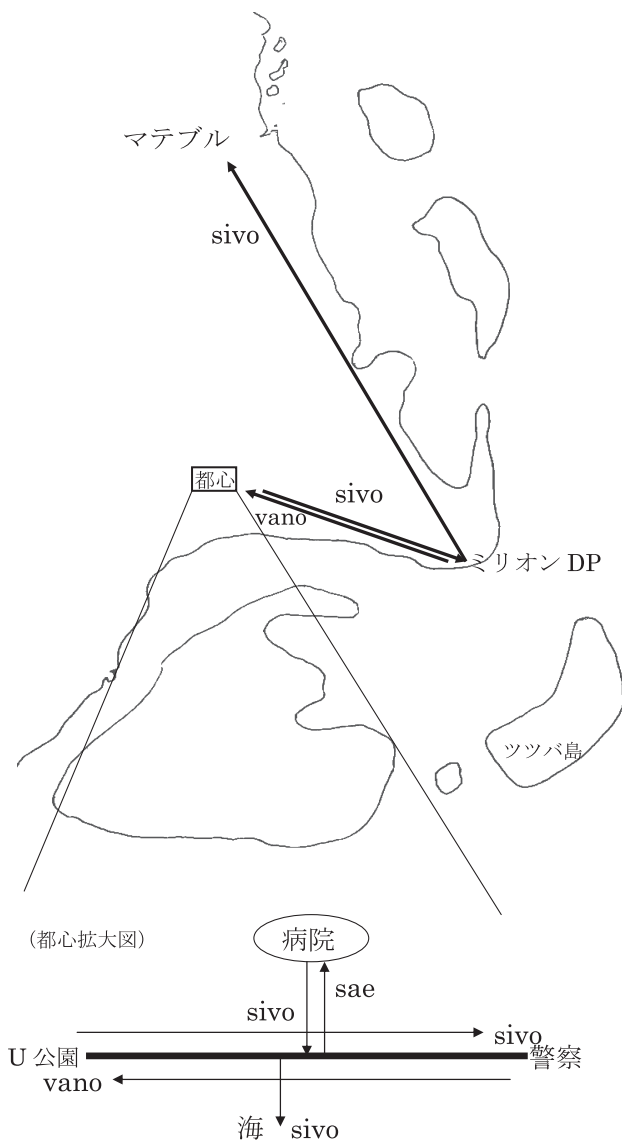
5. サント島内の移動表現

これまでツツバ島内の移動を見てきたが、はたしてツツバ語話者は他の島に行ったとき、その島ではどのように移動を表現しているのだろうか。副都心の置かれるサント島内の移動を例に見ることにする。

ツツバ島からサント島に移動するとき、ツツバ語話者はミリオンダラーポイントと呼ばれる、ツツバ島から最も近いサント島の岸にボートをつける。この浜辺周辺には店はなく、人々は海岸沿いに警察や店のある都心まで、10キロほど乗り合いバスやトラックで移動する。ミリオンダラーポイントからこの都心への移動には vano 「行く、横切る」が用いられる。

また、都心にはツツバ島と同じように一本の道路が海岸線に沿うように走っており、この道路をミリオンダラーポイントから離れる方向、すなわち都心を奥に進む方向には vano 「行く、横切る」が用いられる。ゆえに図7の都心拡大図に示すように警察からユニティー公園には vano 「行く、横切る」が使用される。またユニティー公園や警察からミリオンダラーポイントの方向に戻る場合には sivo 「くだる」が用いられる。さらにマテブル地区のように、ミリオンダラーポイントを經由してさらに都心と逆方向に移動する場合にも sivo 「くだる」が用いられる。都心からミリオンダラーポイント側への移動に sivo 「くだる」が用いられるのは、都心よりも重要度が低いというツツバ語話者の心理が関与しているからであると考えられる。sivo 「くだる」と逆の方向への移動に sae 「のぼる」ではなく vano 「行く、横切る」が用いられるのは、ツツバ語話者が、歴史的な理由から生じたツツバ島内における sivo 「くだる」と vano 「行く、横切る」の対立を、サント島内の移動について述べる際にも適用したからであると説明できる。

都心の一本道から少し離れた丘の上には病院があり、都心の一本道から病院への移動には常に sae 「のぼる」が用いられる。逆に病院から都心の一本道へは sivo 「くだる」が用いられる。また病院と警察、そしてユニティー公園のどの地からも海へは sivo 「くだる」が用いられる。この sae 「のぼる」と sivo 「くだる」は、ツツバ島内の移動と同じく、物理的な上下に依拠した対立であると考えられる。



4

図7. サント島内の移動表現

5.1. 移動表現の省略

これまでではツツバ島内の一地点が起点であるときのツツバ島内の移動表現と、サント島内の一地点が起点であるときのサント島内の移動表現について論じてきた。今度はツツバ島が移動の起点である場合のサント島への移動、さらにサント島内で移動するときの表現を見てみることにする。例えば「私は（サント島の）病院に行

く、「私は（サント島の）マテブルに行く」のような『ツツバ島→サント島→サント島内の目的地』という移動の表現である。

結論から先に述べると、ツツバ島を起点とし、サント島のミリオンダラーポイントを通過してサント島内の一地点へと移動する場合には、次の二通りの表現がある。ひとつは a. 起点から通過点への移動についてまず言及し、続けて通過点から着点への移動を述べる方法であり、もうひとつは b. 起点から通過点への移動には言及せず、通過点から着点への移動だけを述べる方法である。以下にそれぞれの例を挙げる。

a. 通過点への移動が言及される

(7) ka=sa Olotu ka=va na police
1sg.ir=のぼる サント 1sg.ir=行く pp 警察
「私はサント島に行き、警察に行く」

(8) ka=sa Olotu ka=va na Unity park
1sg.ir= のぼる サント 1sg.ir= 行く pp U
「私はサント島に行き、ユニティー公園に行く」

このタイプの文は、二つの動詞句のどちらが欠けても正確な文とはみなされない。ゆえに (8) を基にした次の (9), (10) は非文である。

(9) *ka=sa na Unity park
1sg.ir=のぼる pp U

(10) *ka=va na Unity park
1sg.ir=行く pp U

b. 通過点への移動が言及されない

(11) ka=si Matevulu
1sg.ir=くだる M
「私はマテブルに行く」

(12) ka=si Hokapa
1sg.ir=くだる H
「私はホカパーに行く」

「サント島に行って、それからユニティー公園へ行く」のように、「私はサント島に行って……」の部分つまり ka=sa Olotu……が必須である文 a は、サント島の都心に位置する警察やユニティー公園、店や病院、教会などへの移動を表す場合に用いられる。一方、「私はサント島に行って」の部分が省略され、ka=si Hokapa「私はホカパーにくだる」のように言う文 b は、都心以外の地域、例えばマテブルやホカパーといった地域への移動を表す場合に用いられる。

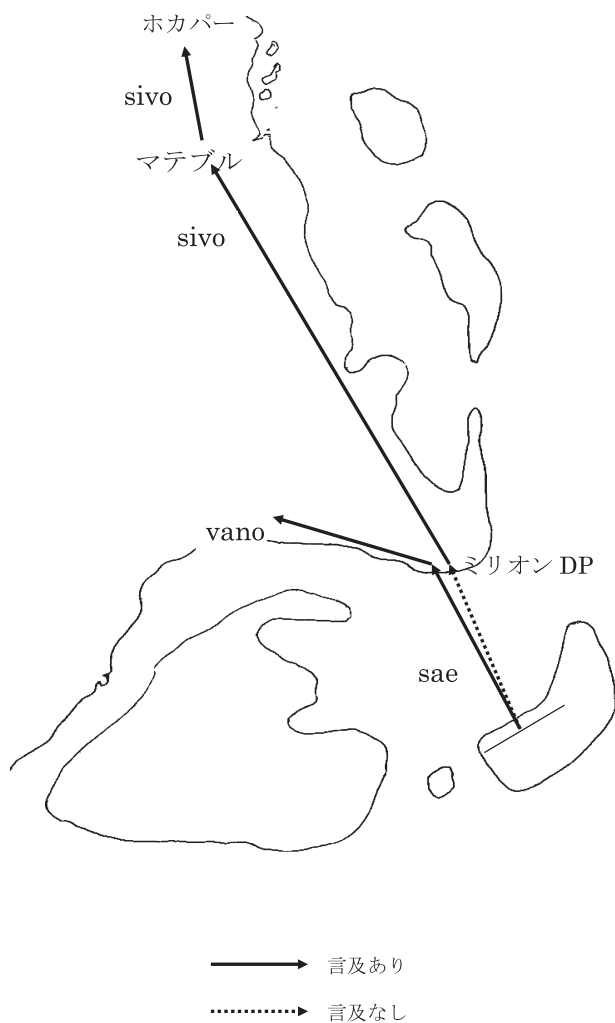


図 8. 移動表現の省略①

5.1.1. 文 a と文 b が異なる理由

文 a と文 b の違いは何に起因するのだろうか。文 a の移動の起点はツツバ島であるが、文 b の起点はミリオンダラーポイントであると解釈できる。本来ミリオンダラーポイントは起点でも着点でもなく、単なる通過点にすぎない。

Mckenzie (1997: 236-7) は西オーストロネシアの Aralle-Tabulahan 語の移動表現について、移動に二つ以上の部分がある場合、移動の方向を示す上で重視されるのは最後の部分のみであり、特に重要でないそれ以外の部分については言及されないと述べている。この先行研究を参考に、まず文 a で起点から通過点の部分が言及さ

れる理由について、ツツバ島内の移動とサント島内の移動の違いを基に考えてみる。

ツツバ島内の一地点が起点で、着点がツツバ島内の店や教会である場合、移動は「私は店に行く」、「私は教会に行く」のように表される。なお以下に示すのは着点が店の場合の例文である⁴。

- (13) ka=va na stoa
 1sg.ir=行く pp 店
 「私は店に行く」

ツツバ島内の一地点が起点であり、着点がサント島の都心に位置する店や教会である場合、「私はサント島に行き、店に行く」、「私はサント島に行き、教会に行く」のようにサント島への移動が言及される。

- (14) ka=sa Olotu ka=va na stoa
 1sg.ir=行く サント 1sg.ir=行く pp 店
 「私はサント島に行き、店に行く」

(13) と (14) を比較すると分かるように、着点がサント島内であることは「サント島に行く」という移動の部分により示される。ゆえに、この移動の部分は着点を伝える上で非常に重要であることが分かる。文 a で起点から通過点の移動の部分が言及されるのは、上記の理由によると解釈できる⁵。一方、文 b について考えると、ツツバ島にはマテブルやホカパーといった地名はなく、これらはいずれもサント島の地名である。ゆえに、ツツバ島からサント島への移動の部分は着点を伝える上で重要ではなく、そのため文 b では起点から通過点の移動の部分が言及されないのだと解釈できる。

以上のように文 a と文 b を比較すると、ツツバ語でも移動に二つ以上の部分がある場合、重要である移動の部分は言及されるのに対し、重要でない部分は省略されることが分かる。このことから文 a と文 b の違いは、起点から着点という移動部分の重要性に依拠したものであると結論付けることができる。

このような省略は、ツツバ島内の移動表現においても観察される。次に示すのは、話者が内海において「家に帰ろう」と周囲の者に声をかけたときの文である。図9のように、発話の地点である内海から丘を登り、その後、丘をくだって家に着くのであるから、次のように発話されることが予期される。

- A(15) da=sae da=si aima
 1pl.inc.ir=のぼる 1pl.inc.ir=くだる 家に
 「さあ、わたしたちはまず(丘を)のぼってから家へとくだりましょう。」

⁴ (13), (14) とともに、着点が教会のときは stoa 「店」に代わり sios 「教会」が現れる。

⁵ この移動表現はさらに、都心に位置する警察や病院、ユニティー公園など、ツツバ島には存在しないものが着点の場合にも適用されたと考えられる。

しかし実際には次のように発話された。

B(16) da=si aima
 1pl.inc.ir=くだる 家に
 「さあ、わたしたちは家へとくだりましょう」

(15) のように丘への移動が言及されるとき、人々は丘の畑でイモやバナナを採るなど、何らかの行為をし、それから丘をくだる。一方 (16) のように通過点（上の例文では丘）を起点とする文が発話されるとき、人々は何もせずに丘をくだる。この二文の違いからも、やはり重要な移動（(15) の起点から通過点への移動）の部分は省略されず、重要でない移動の部分は省略されることが分かる。

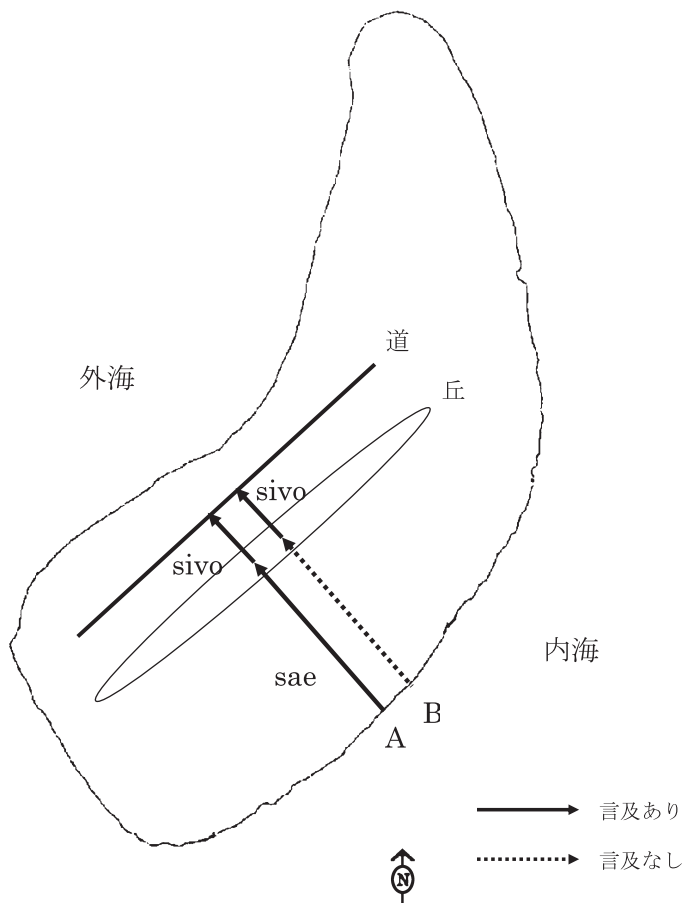


図9. 移動表現の省略②

6. 他島への移動表現

François (2004)によると、オセアニア祖語の話者は陸地に居るとき、土地の上下を基準として移動の方向を伝えたとされる。そしてそれはこれまで見てきたように、祖語に由来するツツバ語でも同様であった。では一体、祖語話者、ツツバ語話者は島を離れて海を移動するとき、もし視界に島がなければどのようにして自分たちの進行方向を知りえたのか。

François (2004)は、海上では太陽の昇り降りを地理的判断の参照物としたとする解釈もあるが(Ozanne-Revierre 1997: 90)、圧倒的に多くのオセアニアの言語は貿易風を参照物としていただろう、と述べている。また彼は「ある言語で、方向を表す軸が東であったからと言って、即ちこれを太陽の動きと結びつける必然性はどこにも無い」とするPalmer (2002: 117)の説に言及した上で、次のように述べた(François 2004: 18)。

かつてオセアニア祖語が話されていた地域に、南東から貿易風が吹いていたことを考えれば、私たちは北西と南東を軸とするコンパスを予測できる。そして「南東方向」(向かい風方向)を表すのに陸内の上下軸のひとつ*sake「のぼる」を用い、「北西方向」(追い風方向)を表すのに同じく上下軸の*sipo「くだる」を用いたと考えられる⁶。(略)そして陸内の移動と同じく、向かい風方向でも追い風方向でもない方向には、島内で横の移動を表していた*pano「話し手から離れていく、横切る、(丘に)のぼる、(丘を)くだるのどちらでもない」を用いたと推測される。

François (2004: 20)は、貿易風とオセアニア祖語との関係を図10のように示した。なおこれは引用したFrançois (2004: 20)のFigure 9に「貿易風(南東)」とその方向を示す矢印を加えたものである。

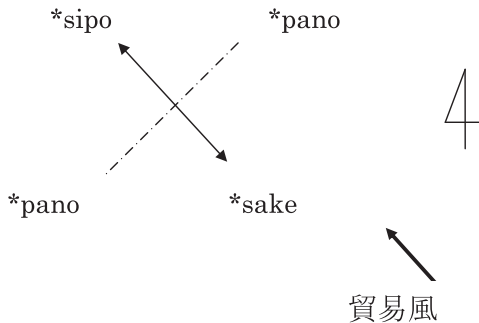


図10. オセアニア祖語の移動動詞(海上)

⁶ François (2004)は祖語の風の名称を例に自説の根拠を示しているが、本論文には直接かわりが無いため、説明の箇所は省略した。

太陽、そして貿易風という先行研究の二つの論を参考に、ツツバ語話者が他の島へと移動する際に一体何を基準としていたのか、移動の動詞とそれが示す方向から考えてみる。

今日、ツツバ語話者は、ツツバ島から副都心の置かれるサント島へ頻繁に移動しているが、他島へは減多に移動しない。そのため、例文(17)から(19)のうち、サント島(Olotu)を目的地とする(17)は自然発話文であるが、これを除いた文はすべて筆者の用意したビスラマ語をツツバ語に訳してもらった文である。またサント島を目的地とする文は、ツツバ島に居るときと海上移動中の両状況で得られた文であるが、その他の島への移動を表す文は、ツツバ島で発話してもらったものである。

(17)から(19)は、すべて「私は～に行く」という意味であるが、文頭のka=は、動詞をホストとする一人称・単数・未然法の主語代名詞であり、動詞に後続する語が島の名前である。

ツツバ島からの移動

- (17) ka=sa Olotu (Santo 島)
 (18) ka=va Malakula
 Tanna
 Oboe (Ambae 島)
 Maewo
 Paama
 Pentecost
 Ambrym
 Natamabo (Malo 島)
 Vila (Efate 島)⁷
 (19) ka=si Ureparapara
 Mota
 Vanua Lava
 Gaua
 Banks
 Toga

これらの例文から、ツツバ島から他の島への移動には、島内の移動と同じ語が用いられていることが分かる。すなわちsaeの異形態sa「のぼる」、vanoの異形態va「行く、横切る」、sivoの異形態si「くだる」の三語である。また興味深いことに、ツツバ島からサント島への移動のみsa「のぼる」が用いられ、それ以外の島への移動

⁷ 往々にしてエファテ(Efate)島は、ポートヴィラ(Port Vila)という都心部の置かれる地名で呼ばれることがある。

には va 「行く，横切る」または si 「くだる」のどちらかが用いられている。サント島への移動を意味する sa 「のぼる」についての考察は次の節で行うことにし，まずそれ以外の島への移動に用いられる vano 「行く，横切る」と sivo 「くだる」について考えてみたい。

6.1. サント島以外の島への移動

地図上で vano 「行く，横切る」と sivo 「くだる」の境界に無数の点を置くと，図 11 のように，ツツバ島から南西－北東の方向に延びる一本の線が現れる。そしてこの線により二分された空間のうち，境界線から下側への移動には vano 「行く，横切る」，上側への移動には sivo 「くだる」が用いられているということが分かる。

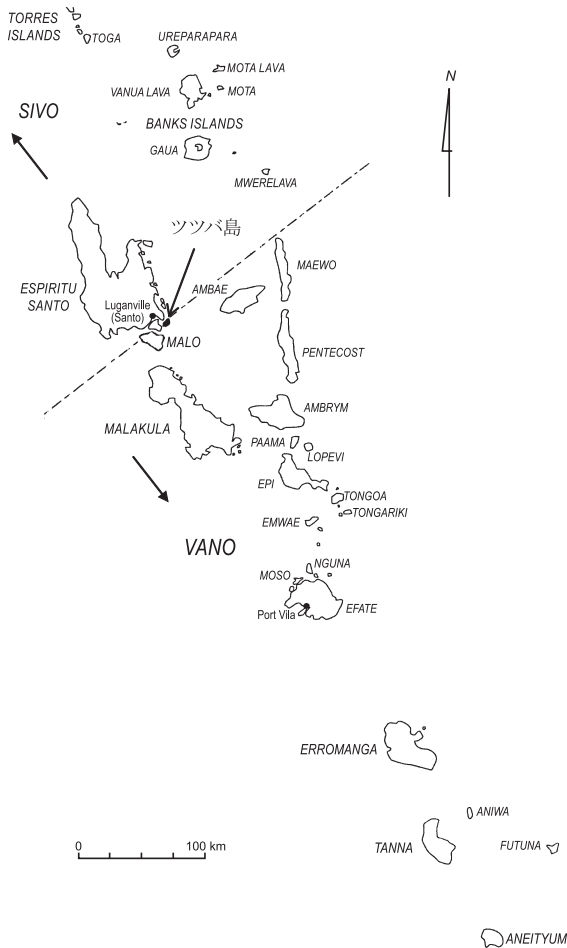


図 11. ツツバ島からの移動に用いられる動詞

図12は海上移動の方角とそれに呼応する移動動詞についてオセアニア祖語とツツバ語を比較したものである。ツツバ語ではサント島への移動を除き、空間が図のように二分割されているにすぎず、祖語の *pano のように、南西、北東の方向への移動を表す語がない。しかも祖語の *sipo には sivo「くだる」が対応しているものの、*sake には sae「のぼる」ではなく vano「行く、横切る」が対応している。これについては次のように説明できる。6.2節で後述するが、ツツバ語話者は、三つの動詞 sae「のぼる」、sivo「くだる」、vano「行く、横切る」のうち、ツツバ島からサント島への移動に sae「のぼる」を優先的に用いた。そしてその結果、残る二つの動詞 sivo「くだる」と vano「行く、横切る」のツツバ島内の対立が、海上空間にも適用された。つまり、このように sae「のぼる」がサント島への移動に用いられ、残る二語が海上空間の対立を示すものとして用いられたため、結果として祖語の *pano が示す方向に該当する語がなくなり、従ってツツバ語では空間が単純に二分割されることとなった。

ツツバ語において、この二つの動詞 sivo「くだる」と vano「行く、横切る」が何に依拠して使い分けられるのか、先述した François (2004) らの先行研究を基に考えると、次の二つの可能性が挙げられる。

ひとつは、①太陽の昇る東方向への移動に vano「行く、横切る」が用いられ、くだるほうへの移動に sivo「くだる」が用いられた、という可能性である。またひとつは、②貿易風が吹いてゆく方向への移動に sivo「くだる」が用いられ、貿易風が吹いてくる方向への移動に vano「行く、横切る」が用いられたという可能性である。さらにこの二つの動詞と貿易風との関係には、上下が風の向きへと拡張されたという次の a と b の解釈が可能である。

- a. 風が上から下に吹くという前提にたつと、風が来るほうは上、風が向かう側は下と捉えることができる。この捉え方に依拠して、風上である南東方角への移動に vano「行く、横切る」が、そして風下である北西方角への移動に sivo「くだる」が用いられた。
- b. 坂を移動するとき、一般的に上りの移動は苦しいものであるが、下りの移動は楽である。同じく海上における移動も、向かい風方向への移動はつらいものであるが、追い風方向への移動は楽である。このような坂道の移動と海上の移動における経験的な類似から、向かい風方向に vano「行く、横切る」が、追い風方向には sivo「くだる」が用いられた。

ツツバ語において、太陽の動きまたは貿易風の向きが海上移動の表現に関係していると考えられるが、どちらがより妥当であるかを考えると、先に4.1節で述べたようにツツバ島内の移動において経路を表す動詞と太陽の動きには関連性が見られなかったことから、海上移動の表現は貿易風の向きに依拠しているとみなすのが自然と言える。

オセアニア祖語 (先の図 10 と同じ)

ツツバ語

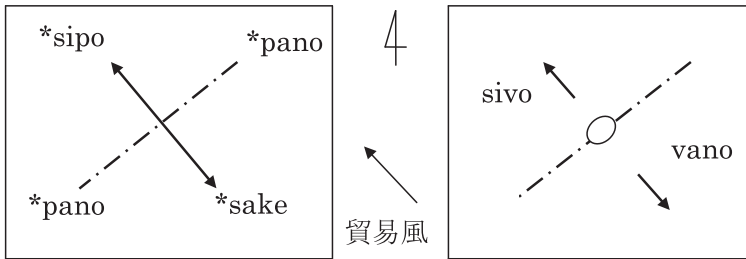


図 12. 海上移動に用いられるオセアニア祖語とツツバ語の動詞

6.2. サント島への移動

海上（ツツバ語では島間）の移動において、なぜツツバ語では祖語の *sipo, *sake に由来する sivo 「くだる」、sae 「のぼる」ではなく、島内で横の移動を表す sivo 「くだる」、vano 「行く、横切る」が用いられるのだろうか。その理由はサント島とツツバ島との関係に見出すことができる。ツツバ島からサント島への移動にのみ sae 「のぼる」が用いられるのは先に例文 (17) で示したとおりである。またサント島からツツバ島への移動には sivo 「くだる」が用いられる。

Ozanne-Rivierre (1997: 90) は、メラネシアの社会では土地の高/低という対がさらに拡張されて、社会的関係や精神的崇拝へも適用されると述べている。彼女はその具体例としてニューカレドニアの言語を挙げ、上方向への動きを表す語が物理的な位置だけではなく、話者よりも地位の高い人が居る場所への移動も意味することを示した。また Donohue (1999) は、インドネシアのスラウェシで話される *Tukang Besi* 語では、土地の高低に基づいた方向を表す語が、社会的、政治的、文化的中心への移動と、中心から遠ざかる移動とを意味すると述べている。

これらの先行研究を基に考えると、副都心が置かれ、商店や病院、中学校・高等学校の存在するサント島への移動に sae 「のぼる」が用いられ、サント島からツツバ島への移動に sivo 「くだる」が用いられるのは、ツツバ語話者がサント島を社会的、政治的、文化的、そして経済的中心である上位の存在として位置づけているからであると考えられる。

このように副都心の置かれるサント島に sae 「のぼる」が用いられるのであるから、副都心よりもさらに社会的、政治的、文化的、そして経済的中心である首都の置かれるエファテ島への移動にも同様に sae 「のぼる」が用いられることが予測される。しかしながら、ツツバ島から首都の置かれるエファテ島への移動を表すのは sae 「のぼる」ではなく vano 「行く、横切る」である。なぜ副都心の置かれるサント島への移動には sae 「のぼる」が用いられ、首都の置かれるエファテ島への移動にはこの動詞が用いられないのだろうか。

ツツバ島民にとって首都の置かれるエファテ島と副都心の置かれるサント島はど

のような点において異なるかを考えると、大きな違いとして、島の発展度ではエファテ島のほうがはるかに上であるが、サント島はツツバ島から距離が近く、人々のサント島への移動の頻度はエファテ島への移動に比べて圧倒的に高い、という点が挙げられる。例えばツツバ島からサント島へは毎日のようにボートが出ており、人々は生活用品の購入や通院のため、頻繁にサント島へと移動する。一方、ツツバ島からエファテ島への移動手段は存在せず、人々のエファテ島への移動はほぼ皆無である。このことから、サント島への移動にのみ sae「のぼる」が用いられるのは、ツツバ語話者が副都心の置かれるサント島を上位の存在とみなしていることに加え、ツツバ語話者のサント島への親近感が反映されているためであると考えられる。

7. 結論

本論文ではツツバ語の経路の動詞 sae「のぼる」、sivo「くだる」、vano「行く、横切る」が、どのような移動のときに何に依拠して用いられているかについて考察してきた。以下に①物理的な上下による対立、②心理的な上下による対立、③歴史的理由により生じた対立、という三つのカテゴリーにおけるこの三つの動詞の関係をまとめる。

① 物理的な上下による対立

ツツバ島内とサント島内において、sae「のぼる」は丘方向への移動を表し、sivo「くだる」は海方向への移動を表す。これは土地の傾斜という物理的な上下に依拠した対立である。

② 心理的な上下による対立

島間の移動において、sae「のぼる」はツツバ島から副都心の置かれるサント島への移動を表す。一方、sivo「くだる」はサント島からツツバ島への移動を表す。この対立にはツツバ語話者がサント島を社会的、政治的、文化的、そして経済的中心である上位の存在として位置づけていることが反映されている。

③ 歴史的理由により生じた対立

ツツバ島内で sae「のぼる」と sivo「くだる」が物理的な上下に依拠して用いられていることを先に①「物理的な上下の対立」のカテゴリーにおいて示したが、sivo「くだる」はまた、ツツバ島内における北東方向への平坦移動も表す。この北東方向への平坦移動は、宣教師の到来というツツバ島の歴史的な出来事に伴い sivo「くだる」が拡張されたことに由来すると考えられる。本来、平坦な移動を表すのは vano「行く、横切る」一語であったが、宣教師の到来により sivo「くだる」の意味が拡張された結果、平坦な移動において sivo「くだる」と vano「行く、横切る」が対をなすようになったといえる。

ツツバ島内の平坦移動における sivo「くだる」と vano「行く、横切る」の対立は、ツツバ語話者が、サント島内の移動や、他島へ行く際の海上移動について語る場合にも適用される。サント島内では、sivo「くだる」は都心から離れる移動を表し、

vano「行く、横切る」は都心へ近づく移動を表す。都心から離れる移動に sivo「くだる」が用いられるのは、都心を上位とし、それ以外を下位とする話者の心理が反映されているからであると考えられる。また海上の移動において sivo「くだる」は貿易風が吹いてゆく方向への移動を表し、vano「行く、横切る」は貿易風が吹いて来る方向への移動を表す。これには次の二つの可能性が考えられる。ひとつは風が上から下に吹くという前提にたち、風下への移動に sivo「くだる」が用いられたという可能性、もうひとつは一般的に坂の移動において上りがつらく下りは楽であるように、海上移動において追い風方向への楽な移動に sivo「くだる」が用いられたという可能性である。

参 照 文 献

- Crowley, Terry (1995) *A new Bislama dictionary*. Suva, Fiji/Port Vila, Vanuatu: The University of the South Pacific.
- Donohue, Mark Hector (1999) *A grammar of Tukang Besi*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- François, Alexandre (2004) Reconstructing the geocentric system of Proto-Oceanic. *Oceanic Linguistics* 43: 1–31.
- Lynch, John (1998) *Pacific languages: An introduction*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- McKenzie, Robin (1997) Downstream to here: Geographically determined spatial deictics in Aralle-Tabulahan (Sulawesi). In: Gunter Senft (ed.) *Referring to space: Studies in Austronesian and Papuan languages*, 221–249. Oxford: Oxford University Press.
- Ozanne-Rivierre, Françoise (1997) Spatial references in New Caledonian language. In: Gunter Senft (ed.) *Referring to space: Studies in Austronesian and Papuan languages*, 84–100. Oxford: Oxford University Press.
- Palmer, Bill (2002) Absolute spatial reference and the grammaticalisation of perceptually salient phenomena. In: Giovanni Bennardo (eds.) *Representing space in Oceania: Culture in language and mind*, 107–157. No. 523. Canberra: Pacific Linguistics.
- Ross, Malcolm (2004) The grammaticalisation of directional verbs in Oceanic languages. In: Isabelle Brill and Françoise Ozanne-Rivierre (eds.) *Complex predicates in Oceanic languages: Studies in the dynamics of binding and boundness*, 297–329. Berlin: Mouton de Gruyter.
- The Republic of Vanuatu 1999 (1999) *Vanuatu National Population and Housing Census*. Port Vila: National Statistics Office.

執筆者連絡先：

606-8501 京都市左京区下阿達 46
 京都大学大学院
 アジア・アフリカ地域研究研究科
 mnaito@jambo.africa.kyoto-u.ac.jp

[受領日 2009年1月17日

最終原稿受理日 2009年7月30日]

Abstract

Motion Verbs and Space Divisions in Tutuba Language

MAHO NAITO

Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science/Kyoto University

This paper will clarify how Tutuba speakers differentiate the use of three motion verbs: *sae* “go up”, *sivo* “go down”, *vano* “go across”. Tutuba language is one of the vernaculars of the Republic of Vanuatu and is now spoken by approximately 500 people. After introducing these motion verbs in detail, I examine how their use is affected by location (e.g. on Tutuba island, on Santo island, and moving between the islands). Additionally, the usage of these verbs in non-physical situations (e.g. in reference to psychological states and historical reasons) is discussed. Finally, the connections of these three motion verbs in these categories are clarified.